

学 位 論 文 題 名

北東アジア古代文化の研究

学位論文内容の要旨

〔目次〕

第Ⅰ部 オホーツク文化と周辺諸文化との関連

第1章 サハリンのオホーツク文化

第2章 オホーツク文化に見られる靺鞨・女真系遺物

第3章 オホーツク文化の起源と周辺諸文化との関連

第Ⅱ部 靺鞨文化と同仁文化

第1章 靺鞨の同仁文化

第2章 靺鞨と流鬼

第3章 同仁文化と靺鞨文化

第4章 オホーツク文化と同仁文化

第Ⅲ部 環オホーツク海の古代文化

第1章 北千島の「オホーツク文化」

第2章 カムチャツカ半島の寛永通宝

第3章 カムチャダールとアイヌ — その文化的交流 —

第4章 オホーツク海沿岸の文化交流

第5章 環オホーツク海の古代文化

第Ⅳ部 北海道と北東アジア

第1章 大陸文化と北海道

第2章 北海道をめぐる北方諸民族の交流

第3章 北海道と銀の道

第4章 アイヌ民族と北方交易

本論文が取り扱う北東アジアとは中国の吉林省・黒龍江省・内蒙古自治区東部、ロシア連邦のサハリン・沿海地方・アムール河流域・レナ河流域、西はバイカル湖から東はベーリング海峡までのシベリア北東部、オホーツク海北岸地域・カムチャツカ半島・千島列島を含む地域の総称である。

第Ⅰ部ではオホーツク文化と周辺諸文化との関係を論じている。オホーツク文化は従来指摘されてきたエスキモー文化との類似よりも、古コリャーク文化との類似に注目すべきである。オホーツク文化に見られる家畜飼養の経済形態は、沿海地方・アムール河下流域の家畜飼養の伝統が流入したものである(第1章)。オホーツク文化に特徴的な大陸系遺物は靺鞨文化と女真文化にその起源と系統をたどることができる。しかしながらオホーツク文化と靺鞨・女真文化では住居・土器・労働用具・出土獣骨などに多くの相違点が認められる(第2章)。オホーツク文化の特異性は「沿海の生活」「大陸系文物の受容」「精神文化」(彫像・墓制・葬制など)の諸側面において顕著である。オホーツク文化の担い手は中国史料に記されている7世紀の流鬼、13世紀の吉里迷に比定され、さらにそれはギリヤーク民族に相当する(第3章)。

第Ⅱ部では靺鞨文化と同仁文化について考察している。ロシア連邦の学界で靺鞨文化、中国の学界で同仁文化と呼称されている物質文化は実際には単一の文化である。靺鞨=同仁文化の調査は勿吉・靺鞨の歴史研究の進展に有効である(第1章)。靺鞨の首長が帯びた「大莫弗瞞咄」という称号は、突厥の支配が靺鞨の領域にまで及んでいたことを示している。サハリンの流鬼はそのような突厥支配下の靺鞨と接触および交流をもっていた(第2章)。黒龍江省の団結遺跡と黒龍江(アムール河)北岸のブラゴスロヴェーンノエ遺跡からほとんど同一の土器が出土していることは、初期の靺鞨文化と同仁文化の共通性を示唆している。またそのことは靺鞨の源郷がどこであったかという問題を解明する可能性を与えるものである(第3章)。オホーツク文化の土器との類似がかつて指摘された内蒙古自治区ハイラル(海拉爾)の土器は、ザバイカル地方東部のブルホトゥイ文化の土器である。この土器は室韋のブルホトゥイ文化と靺鞨の同仁文化の相互関係を検討する上で、注目すべき重要な資料である(第4章)。

第Ⅲ部ではオホーツク海をとりかこむ環オホーツク海の諸地域の古代文化を考察の対象としている。第二次世界大戦前に北千島から発見され、オホーツク文化の遺物と言われたものは、必ずしもすべてがオホーツク文化に属するものではなく、その中には古コリャーク文化がカムチャツカ半島南部にまで波及した遺物も含まれている(第1章)。17～18世紀にアイヌ民族とカムチャダール民族の間には交易が行われ、両者は通婚関係にさえあったが、そのような交易はカムチャツカ半島から発見された寛永通宝などから確認されるとともに、14・15世紀まで溯る可能性がある(第2章)。かつて村山七郎は言語学の側から、クリル(Kuril)の名称の起源はクシ(Kushi)ではなく、クジ(Kuzhi)であったろうと推論し、それはアイヌ民族をギリヤーク民族はクギ(Kughi)とよび、カムチャダール民族はクジとよんでいたことと関連するであろうと指摘したが、これは北千島における考古学上の知見から見て十分にありうることである(第3章)。オホーツク海北岸の古コリャーク文化の遺跡から、中国の北宋朝の貨幣である皇宋通宝が発見されたが、それはオホーツク文化のギリヤーク民族と古コリャーク文化のコリャーク民族の間に文化交流があったことを示唆している(第4章)。ギリヤーク民族とコリャーク民族はオホーツク海の北西岸において相互の交流をもっていた可能性がある。オホーツク文化のギリヤーク

民族と古コリャーク文化のコリャーク民族の接触の結果として、両文化には類似した遺物が見出されるのである(第5章)。

第Ⅳ部では北海道の古代文化と北方諸地域の古代文化の相互関係を論じている。北海道は先土器時代から縄文文化の全期間を通じてつねに大陸の文化圏内にあり、大陸の諸文化の波及は間断なく北海道に達していた。そうした文化の波は続縄文文化にも認められ、次いでオホーツク文化という大陸系の文化をもった民族の渡来に見られるように、北海道の古代文化はつねに大陸の文化との密接な関連のもとで発展した(第1章)。北海道の古代文化には北東アジアからのさまざまな文化的影響が反映されているが、それは大陸の古アジア諸民族とツングース諸民族の移動と拡散の結果である。北海道の古代文化には、アイヌ民族の祖先と北方諸民族の祖先たちの交流が示されている(第2章)。北海道東部の遺跡から発見された銀製品は、その出土例を大陸にたどることができる。それはおそらく大陸からの鉄製品の波及に伴ってもたらされたものと考えられる(第3章)。近世のアイヌ民族の墓から発見された円形の青銅製装飾品は、その類例を広く大陸にたどることが可能であり、それは近世におけるアイヌ民族と北方諸民族との交易によってもたらされたものである(第4章)。

学位論文審査の要旨

主査	教授	小山	皓一郎
副査	教授	煎本	孝
副査	教授	津田	芳郎
副査	教授	林	謙作

学位論文題名

北東アジア古代文化の研究

本論文の研究成果は、まず第一に「北東アジア」という新たな地域区分を設定し、この地域が一つの歴史的・文化的世界として研究対象となり得ることを実証したことにあると言えよう。わが国の東洋史学界には古くから「東北アジア史」という研究領域があるが、これは主としてマンチュリア（満洲、現中国東北地区）と朝鮮半島を対象としており、シベリアの歴史と文化は上記の「東北アジア史」の分野で付随的に触れられるか、もしくはロシア人のシベリア以東への進出に関連して言及されるにとどまっていた。他方、民族学・人類学の分野では「北東アジア」という地域区分が戦前からあったが、これは主として西はエニセイ河から東はベーリング海峡まで、北は北氷洋から南はアムール河までと、その南の沿海地方、およびその東方のサハリン・千島列島・カムチャツカ半島を含むロシア連邦の東シベリアと極東を指している。

ところで、上記の「北東アジア」のうちマンチュリアの吉林省・黒龍江省および内蒙古自治区北東部の古代文化は、旧石器時代から鉄器時代にいたるまで、アムール河の北のシベリアの古代文化と密接に関連していることが、近年の中国とロシア連邦における考古学研究によって明らかにされている。このような研究状況に対応して、本論文は上記の諸地域を「北東アジア」という総称のもとに包括し、この広大な地域の古代文化を総体的に考察することを意図している。もっとも本論文は、北東アジア諸地域の古代文化を網羅的に研究したものではなく、実際には北海道とその北方諸地域の古代文化の関係を解明する手掛かりとして、北海道の古代文化と関連のある北方諸地域の古代文化を研究したものである。また本論文の論述の多くは北海道の古代文化のうちでも、北海道のオホーツク海沿岸にその遺跡が分布しているオホーツク文化と北方諸地域の古代文化の研究に充当されている。そのため本論文は必ずしも北東アジア古代文化の研究の専攻論文であるとは言えない。

しかしながら北海道の古代文化は北東アジアの古代文化と密接に関連しており、北海道の古

代文化の研究に際しては、北東アジアの古代文化を研究することが不可欠である。とりわけオホーツク文化の研究には、沿海地方・吉林省・黒龍江省・アムール河流域・オホーツク海北岸地域の古代文化の研究が必須である。一方、吉林省・黒龍江省・アムール河流域の古代文化は北海道の古代文化に大きな影響を及ぼしており、環オホーツク海の諸文化は北海道の古代文化を含めて、相互に何らかの結びつきがあったと考えることができる。

このようにして本論文は、北海道の古代文化の考察を手掛かりとしながら、実質的には北東アジア全域の古代文化の解明につながる研究成果に達している。もっとも本論文が単なる歴史学の枠を越えて、他の専門領域にも及んでいるため、細目については幾つか再考すべき点も見出される。例えば、考古学的遺物の比較や系統づけには、論証の手続きの不備な部分が指摘され、諸民族の儀礼・生活誌の解釈についても、専門的な立場から異論が提出された。また漢文史料の微細な字句解釈などにも、幾つか問題が残されている。しかし、いずれも瑕瑾の程度を越えるものではない。

以上を要するに、本論文は白鳥庫吉、津田左右吉、日野開三郎らの文献史学による歴史地理学研究の成果を十分にふまえ、これに考古学・文化人類学・言語学資料に基づく知見を加えて、今後の学際的な研究を容易にする場を作り上げたと言えよう。また、北海道史を日本史の視点から解放し、北方文化圏の中に位置づけたことは、著者独自の構想であると同時に、本論文の優れた成果であると評価しうる。

本審査委員会はこのような評価に基づき、全員一致して菊池俊彦氏の研究業績は博士（文学）の学位を授与されるに値すると結論するものである。